

下野国の宇都宮右馬頭成綱より里見義通宛へ書状が届いたのは、鶴谷八幡宮修繕の一件より暫く経ってからのことである。

その内容は、古河公方の嫡子・高基に与して欲しいという嘆願に尽きる。高基の正室は宇都宮の出であり関係も深い。

「さつそくではあるが、宇都宮のことは築田殿も承知しておろうな」

義通は、先般の築田政助が云い残していった一件につき、正木通綱に打診した。

「干渉せぬことが肝要なれど、当家の意をこの書状もろとも、築田殿に送っては如何でしょうか」

「宇都宮の勧誘を教えよと？」

「一応の筋は果たせませす」

「さもありなん」

この機に古河公方の代替わりを図れば、娘婿として宇都宮氏の発言力も増す。この躍起は仕方のないことだろう。

「ところで、太郎は那古寺から戻らぬか？」

「玉隠和尚と何を歓談されたものやら。庫裡に籠もって書物を漁っておいでとか」

「困ったものよな」

義豊の思惟は、義通には理解できない。が、先の歓談から察するに、玉隠英輿は大いに理解を示したとと推察される。その心の奥底を、親よりも禅僧に寝取られたような不快感があった。

「このままでは、おいそれと家督を託せぬ」

義豊もいい歳だ。

幸いにして安房は大きな内乱もなく、初陣をさせずにここまで来てしまったが

「なにか合戦があれば、心の内を覗き込む好機なのだがな」

それについてはと、正木通綱が進み出た。

「上総国では武田の系譜で真里谷に居を構えた一族と、千葉介の被官・原式部との間に不穏な気配が漂ってござります」

「武田といえば、我が里見家が安房に覇を唱えた頃と同じくして、たしか西上総に居を構えた

と聞くが」

「もとは里見ともども古河公方に据えられた同輩にござります」

「代を経ると、とんと疎遠であるな」

絵図を広げながら、義通はぼつりと呟いた。上総の新興勢力である武田氏は、甲斐国から流れてきた甲斐守護職の系譜である。武田氏も足利公方家のとぼちりで、内情は大変に苦しい状況にあった。

かつて古河公方黎明の折、里見義実ともども古河公方に仕えてきた武田信長が西上総に任じられた。これは里見氏同様、当時の上杉氏勢力に対する戦略である。

上総国には鎌倉幕府以来の名族・千葉氏があり、武田氏はこれに対処してきた。里見義実は武田信長の娘を娶り、少なくともこの当時、両家は蜜月の関係であった。

しかし、代を経て疎遠ともなると、両家の行き来はまったく絶えた。

武田家も信長の孫たちが庁南と真里谷に分裂し、それぞれ地名を姓として、いつしか誼を分かち対立すら始めていた。

現在、勢力を拡大しているのは、房総武田氏庶流の真里谷家側で、当主・真里谷信勝は積極的に千葉介被官・原式部少輔胤隆を攻めかけている。

安房国の外では、絶えず戦乱が続いていたのだ。

「つまり、この戦さに荷担せよと？」

里見義通は首を傾げた。

「若殿も戦さ場を目の当たりにすれば、机上の事だけでは世を渡れないことを、ご理解なさいましょう」

口実にはいいことだが、それが好機か、否か。

「太郎の性根は筋金入りじゃぞ？」

義通は気乗りしなかった。「里見家嫡子としての自覚を促す必要が、ござりますゆえ。我らとて、担ぐ主が不甲斐ないようでは困ります」

正木通綱の申し様は正論だ。

「主家とはまず家臣を扶持してこそその主家なり」

「若殿は里見の（一統）を望む由」

「それは理想じゃ。本気でそれを志してみよ、たちまち里見は在地の衆から背を向けられて、立ちゆかぬ」

「難しいことをお考えの若殿じゃわ。さりとして、在地の衆は里見以前からこの地に居る者にて、代表に担ぐ以上の考えを皆が持つ訳ではござりませぬ」

足利・上杉規模の支配層ならいざ知らず、守護職として在地に手を焼く御時世に、義豊の理想は新し過ぎた。

守護程の者として、在地寄騎の親玉に過ぎぬのが、当時の社会通念なのである。

「寄騎として、食えずば里見は在地の者に見放されてしまう。儂として、困るわ」

義通は苦笑した。

「真里谷家へ加担の段、この大膳にお任せいただけませんか」

こうまでいうからには、正木通綱なりの考えがあつたことだろう。それ以前に、里見家が在地豪族たちから背かれてもしたら、独立性の薄い正木氏も大いに困るのである。

閉じている目を開き、現実を直視せよ。

通綱の正論に異を唱える理由はない。

「たのむ、なんとか兵を損なうことなく、あれを合戦の場に立たせてくれ」

「御意」

「太郎の目を、いい加減、覚まさせねばならぬでのん」

正木通綱へ殊勝に依頼するそぶりをしながらも、内心、義通はは別のことを考えていた。

このとき里見義通は、混乱に乗じ、上総国内にある久留里城を奪い取っていた。真里谷氏との均衡が保たれていて大事は生じていないが（久留里を足場に、上総国へと押し出す好機かも知れぬな）

と、義通は考えていた。

これは、正木通綱も同感だろう。

（真里谷に加勢しつつも、あわよくば。こういう手筈は、早くしておくべきだ）

だからこそ、この話を切り出したに相違ない。

（里見に正木あり、まことによき懐刀である）

もし里見が不甲斐なくば……。

きつとこの通綱が里見に取って代わり、在地の代表となりて、安房を掠め取るに相違ない。

それが、下剋上なのだ。幸いこの知謀者が里見に尽くしている。この有難味を嘔み締めていればこそ、義通は通綱の好きを許すのである。

義通はただただ、苦笑いを浮かべるのであつた。

十十十

割れる家（1）

夢酔 藤山